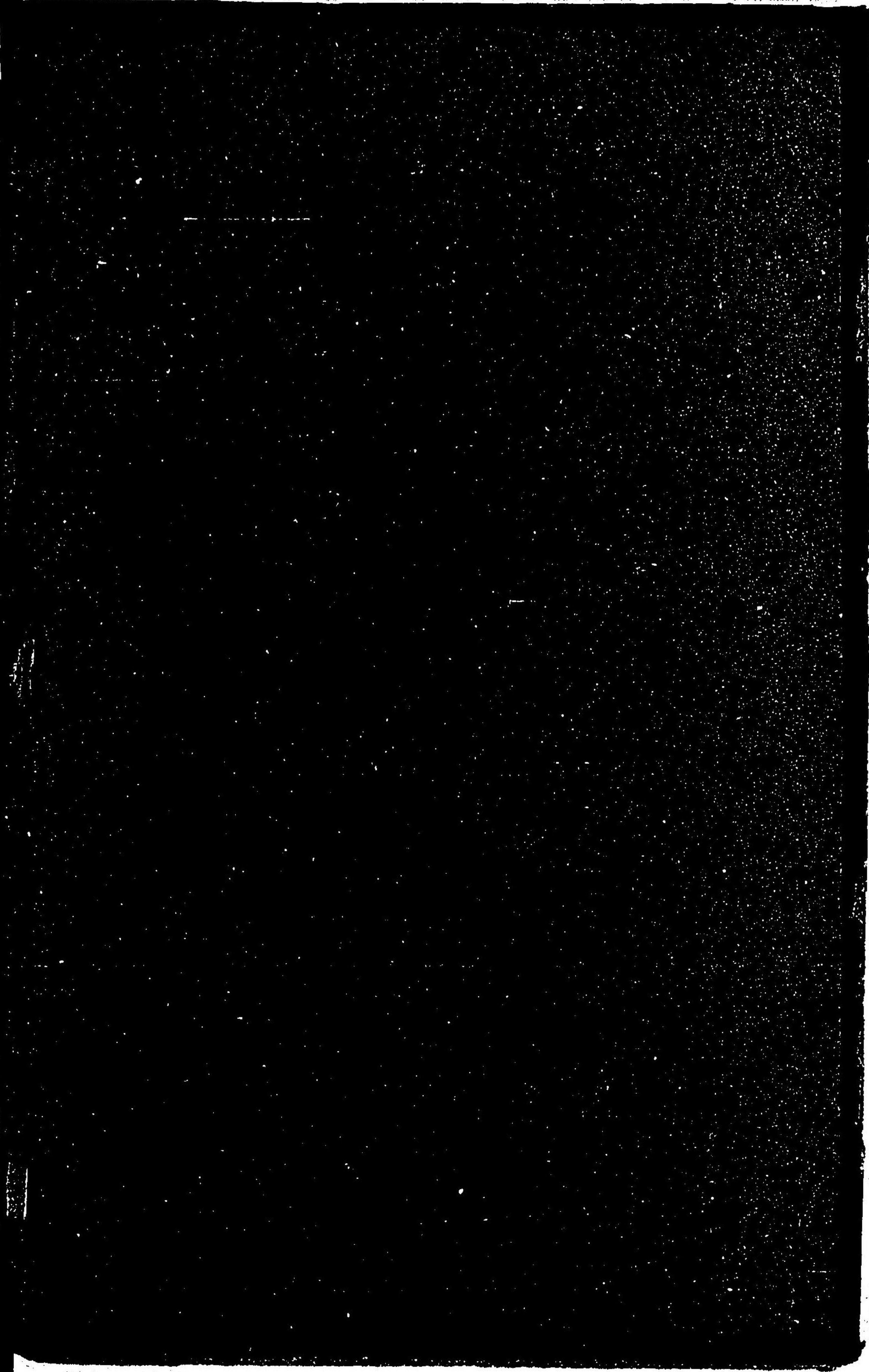
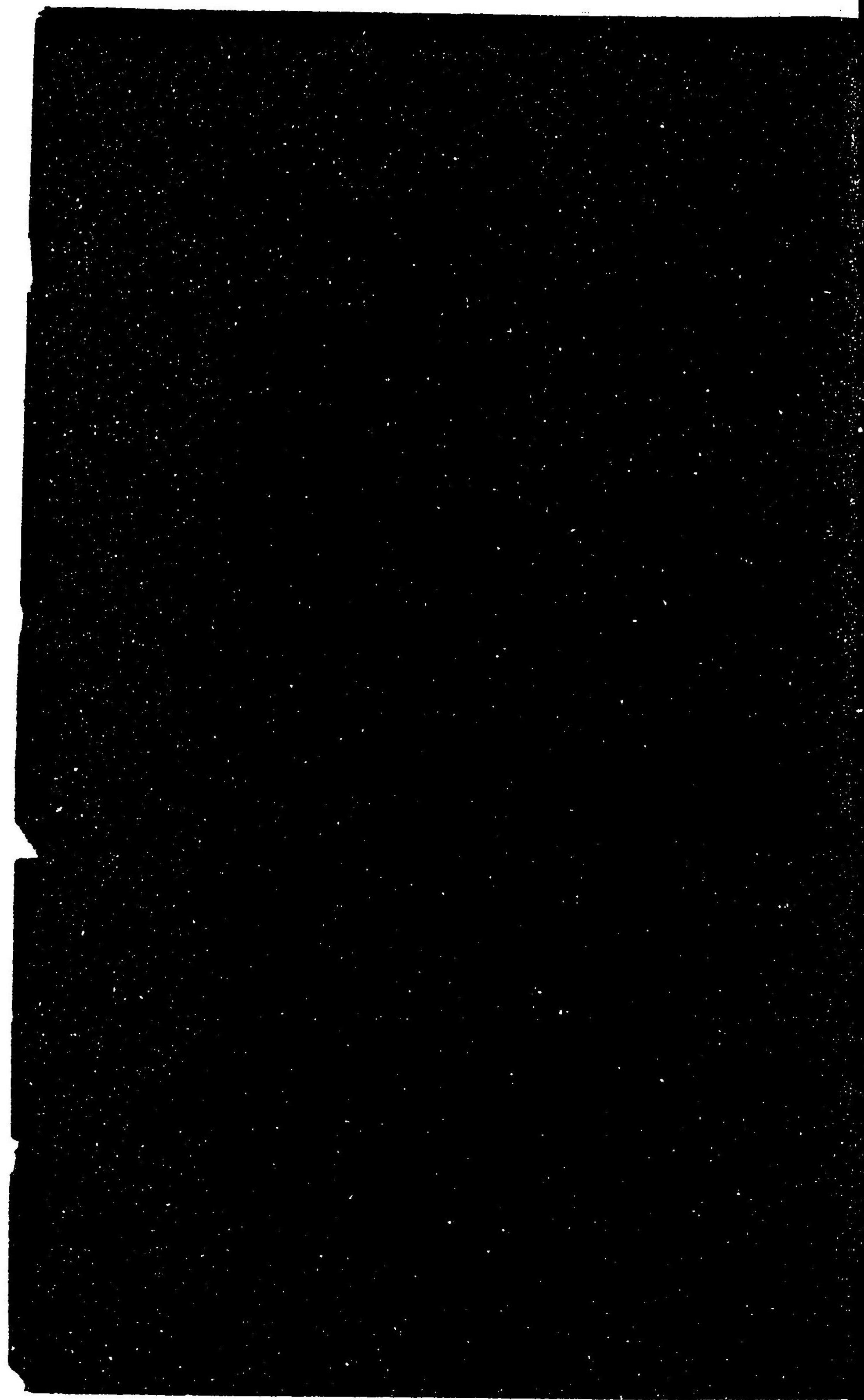


339
6

忠
篤
公
御
遺
稿

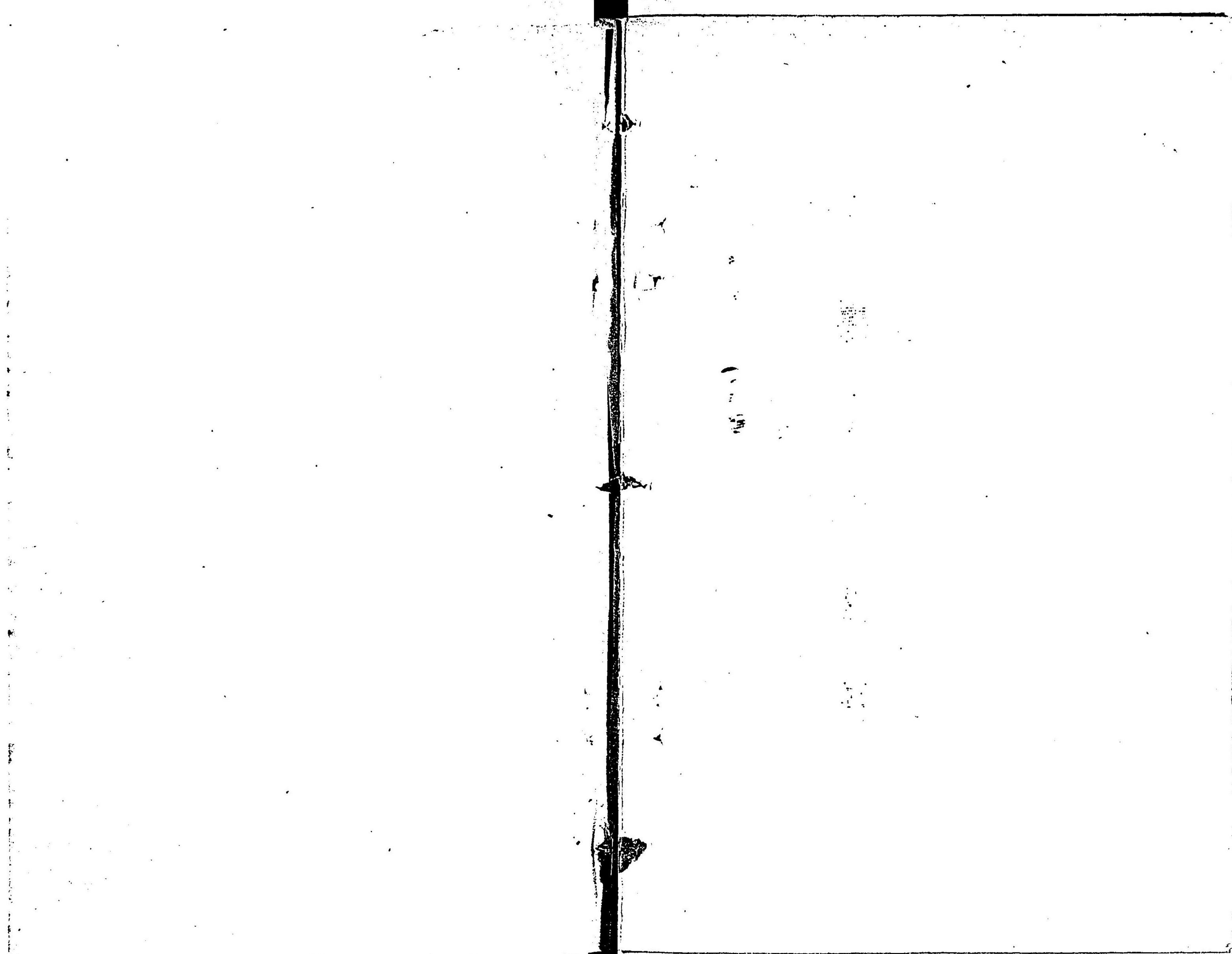
完

忠篤公御遺稿



889
6

忠
籌
公
御
遺
稿

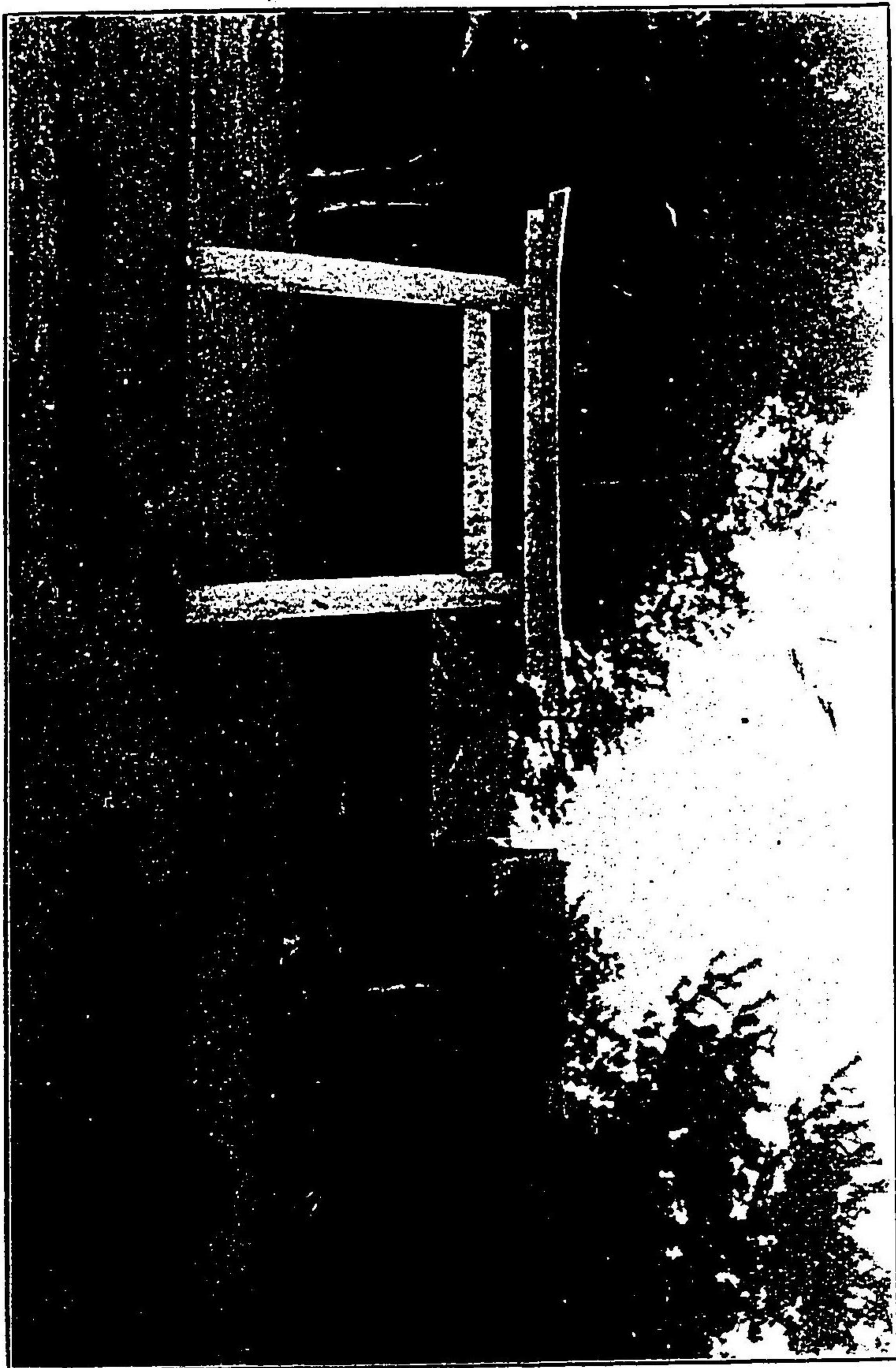


静也打く甲子も桂
雨空日と棟方也花の信
門ま主人名ははる月
手鼓子宿酒の模様

清々



忠 壽 公



泉 神 社



足具 緘糸紺塗黒



鹿 角 兜

目次

口 箴	一
○(文武の心得)	十九
對秋月辭	一〇二
こそこの枝折	一一三
戻り笠	一一六

明治
44.11.16
内交

口は禍の門といづれ

口は禍の門といづれの時にかいひそめけん佳肴珍味も此門より入金言妙句も此門より出づ花の晨月の夕一杯の興をかき茶菓杯盤に打向ひたるばかりにては茶の湯料理の献立見たる心地やせん賓主相對して月を友とし花にめて風雅の情を盡すとも互に筆とりて談するならば異國の人に對するが如くにて埒のあかぬ事なるべしいたしかゆしにくしかあいしの度毎に目を見ひらき手まね足すりにも猶通じかぬる時は紙よ硯よとふためきてごうくと墨するいとまもいか斗か口をしくももどかしくもあるらんされば口なくんば有べからずものいわずんば有べからず食はずんば有べからず時を感じては百千のとりに鳴き出て花にやどる鶯の友を喚び草に隠る雉子の妻を

戀いて霞渡れる野邊の長閑なるに子を思ふ雲雀の空に轉ても猶栖を
忘れざるはあわれ深くや侍らまし椋鳥といふ鳥は秋の木の實を啄比
はぎやあゝとのみ鳴てかしましさが衣更着の空晴て日影暖なる時
は松の梢杉の木の間にふくれて百鳥の囀をうつし様々の聲を鳴出し
て樂しみとやは思らんもろこしの鷓鴣といふ鳥は能く物いふと文に
も記され詩にも作られたれば唐音にはきよなる鳥と見えたり我邦
に渡りて大和言葉には舌のとゝかぬ所あるにや爺口鼻おてふより外
は更に云事なしそれともとゝうと云時もちやゝあかゝあと云時も
ちやゝあとこなたの心から三聲別名には分つらん古き物はすたれ
新しき物行なはるゝは世の中の態にて今時は九官鳥の能辯にいひま
くられ唐にても昔の如くには賞翫なかるべし鳥も獸も聲なき者を聞
かず魚は聲有者まれなりあなごかじかの類たしかに其魚の聲やらん

覺束なし虫は腹鳴翼鳴胸鳴など其鳴く所品々にて聲有者半より少な
からんか總て聲を發する者同じからず美なる者有り文をなす者あり
いさぎよき者ありやさしき者あり淋しき者ありかしましき者あり猶
種々の多き中に人の聲の妙なるに若く者なし先づ三十字餘一文字の
文をなして天地を動し鬼神を感ぜしめ男女の中を和らぐる事神代よ
り始りし妙音なれば申もなかゝ愚也しかれども當世は雨乞の歌を
讀ても雨一筋もふらず軒の忍ぶの露ばかりも結ぶ便りと讀て贈れる
も多くは古みのしたるきに落てはてはくしけづる手ふき反古とはな
れりけるかくいへば和歌の徳なきに似たれど今を以て古へにくらぶ
れは濁江の影みへぬ心の底の清からぬ事のみ多ければ鬼神の感もな
かるべし三筋の糸にこまかけて引手も繁き撥の數々長歌淨瑠璃の其
ふしゝのうるはしきに心動きてこれよりゑにしの媒ともなるは聲

の美なるによる者也今日は江戸入のはれとて看板新しく脚半取かへて作り鬚ひげの奴共鳥毛臺笠ふりつゞけ勢ひ猛りのゝしるはよそ目にもいさましき心地ぞする小石まじりの登り坂高荷の車轟とどろかしゑい聲出しておし上るは只かしましき計也其傍の藪のかけ誰かすむいほともしらぬ共鉦打ならしてかすかなる念佛の聲は朝暮のいとなみさへ思ひやられてことさらに物淋し垣根まばらに梁たわみたる立關がまへ小娘共の集りて時ならぬ手まりの歌さへやさしきに其中に弟の守りに當られて歳よりもおとなしくねん／＼ころ／＼うたひたるはやさしさも一しほ増りてぞ覺ゆれ花見がてらの大師参り小人まじりの女子連に錢とらんと女乞食の打ひれてしたひゆくはうるさき聲とやいわん此外の品々も指を屈するにいとまあらずこゝに一つの妙音あり多くは能辯の舌頭より流れ出て利をなす事あり害をなす事あり其利

害の得失たるやあさなへる索なまきの如く環たまきの端なきか如し名付ていつわりといふいつわりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからましと古き歌にも讀みたれば昔よりして聞へたる聲なりけりそれより次第／＼に世と共に變調の聲をなして濱の眞砂まごのよむともつさず十露盤じゆばんの玉のはじくとも及べからず神はあだしこととて大きに穢けがれとしたまひ佛は妄語まうごと誡いさめたまふ儒家にはこれを食言と呼ぶあらはれども罪なきものを鐵砲といふ今様は萬八ともいふなるよしいづれの所の萬八が名付たるらん軍中には謀とも唱へたり楠正成は八尾別當が心を奪て味方につけ猪股小平六は盛俊が力をくじきて一番首の功を立つ長坂跡部は勝頼の勝かちを妨げて武田の家を滅し菅野上原は則政の則のりを破つて上杉のかぶを倒す今の代はこれを以て掛取の大敵を防ぎ急用の金銀を調へひいさの垣を結び過の上ぬりをなしまけおし

の情こころを助け男女のなかをあしくしわんぱく小僧の泣を止め暗主の耳目を塞ぎ輕薄のてにをはをよくし正直者に損をとらせ間に合ひの尻頭をつくろい筋なき事をほめはやして愚物の心を悦ばしめ君臣の間を遠ざく世に山師と稱する者は此一術に徹底してをそろしきそらねを鳴な出せり金言妙句も世の聖賢に先を越されれば今時の工夫にては多くは古物の燒直しにしていわでも知れたる事共也總てよからぬ事のみ多くして益ある事は少なければ口に諸の不淨をいわす心に諸の不淨を起す事なかれとむかしくの神道者が禍の門とは名付たるなるべし。

○
 文といふは今日我が勤むる本意をせんさくして時々刻々に忘れすこれを修し得る事第一也古への道を學ぶも今日の用に立んが爲也扱常に仕覺へたる事には了簡も工夫もつき安き者なれども又變に當る時の事をもかねて工夫をして良友と論談し置時は變に逢ふても其論談たすけとなりてうろたへさるもの也先づ我身の上にていわば隱居の事なれば家政のせわをするにも不及事なれども是迄代々御厚恩の蒙たる上に我等又莫大の御恩の蒙たれば何卒御厚恩の報したく外に仕方もなければ在所へ參り儉約を旨として其餘力を以て家に益有筋を行ひ風俗のせわをもいたし當主のたすけになりいさゝかにても軍役のたすけになり候筋を行ひ候て隱居の上の御奉公と存するな

八
り是あらまし我身の文也此道の工夫の種は人の物語を聞き古への書
をも見てそれらを以て考の種とする也扱又兵糧用意の工夫をなし蠻
船着岸の時の心備をも工夫し我身もよはらぬ様に武術又は歩行に身
をこなして筋骨の衰さる様に心かくる是我身の武也一騎の士も面々
當前を省見は道は近にある事知るべし主恩の深を感すれば武士一己
の誠は立つ物也文なき武は全からず武なき文は全からず平家の大將
たち武ある人少し大方公家の様になりたる故木曾が小勢に破られぬ
木曾は小勢を以て平家を破りたれども文道を修せざる故に頼朝に亡
ぼされぬ文武かた／＼かけても用をなさざる事明也孔子も食を足し
兵を足し民をして是を信ぜしむと曰たるは即富國強兵の事也教ざる
民を以て戰是これを棄といふと曰しは是即鍛鍊也今川了俊も文道を
しらずして武道ついに勝利を得ずといへり近き所を忘れて遠き所に

のみ目をつくるは灯提持の足本の石につまづくが如し

對秋月辭

今宵月明なり左に觴あり右に孤樽あり我足れり夫秋は陽氣漸くおと
ろへ陰氣はじめて動きそむるより次第に寂然として物の哀れ彌まさ
りて春の裏なるべしこれを人にとりては病にあたりされば風の心
地も身にしみて空行雲の行衛を見ては我身の末をおもひやり篋の水
の滴を聞ては流れて早き光陰をおしむ久かたの月のさやけきに對し
て古にし人のながめしかげも其儘に光をとめて昔なつかしく思ひ
出らるゝのみか後の世の人もこの月を翫らんとおもへば傾くかげの
おしまれていとあわれふかしおもわねば淺く思へば深き草葉にすだ
く蟲の音までも皆秋をむかふるにやと秋月のけはひたとふるに物な
くこれが爲に淵明李白も枕上に毫をふるひ小町つらゆきが硯の海は

くみつぐすともこの秋色をいかにとやせん况や予が風雅は夏爐冬扇
にひとしければ筆をくだすの罪もおそましかれといさゝか肝腸をは
いて獨りこゝろを娛しましむ嗚呼秋色なるかな

明らかに過去未來みん

月の照

此篇故忠籌公親シク領内荷路夫村ヲ巡檢シ生祠ヲ建テ兇荒ト軍用トニ充テシガ爲メニ稗ト鉛トヲ賽セシメントシテ畫策スル所アリシ日ノ紀行ニシテ簽シテこそこの枝折ト云フ當時ノ光景掌ニ指スガ如シ果然天保年間ノ兇歲ニハ蓄積セル稗ヲ以テ其急ヲ賑ハシ戊辰ノ役ニハ鉛ヲ以テ銃丸ヲ製スルヲ得タリ公ノ達見用意ノ周到ナル實ニ敬虔ノ情ニ堪ヘズ宜ナルカナ之ヲ祠ニ祭り以テ其遺德ヲ仰グ本年偶公ガ百年祭ニ相當セルヲ以テ此ニ抄出シテ以テ後者ニ諗クト爾云フ

こそこの枝折

享和辛酉のとし彌生後の六日思ふ事ありて荷路夫といふ山里に赴く一村雨の晴れ行くも添野のあたりは杖を曳き寛明溪舟打つれて道す

がら物語りし上田の松並木より右に轉じて山を越へ後田村にいたるこゝより寛明が暇乞して立歸りぬ大津の河原に駕をとめ具したる下部共こへ終りて小舟に乗りて渡るに山川の流早く底清くして滄浪のむかしも思ひ出らる向ひの岸は畑かけて花さける菜の水に落ちたるさま民の心もあしはかれて心細し富田村をも打過ぎて沼部村の八右衛門といふものゝ家に休みぬ

此あたり春まだ永し桃櫻

下小川の山路にかゝり御前淵といふ岩を見るに山腰に一樹のけやき有り老幹擧曲して生のぼり技葉淵に臨めり水中に籠岩と云ふあり水うづ巻きて碧潭藍の如し驪龍の窟もかゝる處にやと各戰慄の思ひをなせり下小川と井戸澤と云ふ所の境に小川あり橋を渡りて里人に問へば松の下川といふ山川の流清ければ心の底も清らか也

里人の汲める流れの松の花

一四

此處より山路にかゝり坂を登りて汗をぬぐひとらげに足を休む六地藏と云ふ所なるよし東を臨めば海は渺々として長風はたへにせまり重山波濤のごとく連れり元來し方を見をるせば谷あいより川の流れて遙に見えて淺瀬の浪白し山のあなに菜畑麥畑の色あざやかに見渡したるけしき言葉にも及ひかたし

山越しに菜の花見ゆる高根かな

こゝより坂を下る此邊山あいなれば溪水岩に鳴きて流るゝけしき千念一時に空しきがごとし旅人村黒田村の境にしばし休て行けり野飼の馬共道もなき山のけはしきもいとはず鹿の通ひ路に艸くい遊べり此里に産せる馬なれば蹄の勞もなかるべしと皆人かたりあいて過ぎぬものゝふは猶しも心こむべき事にこそあれしばらく行て道より下

に人家あり谷川前に流れてけしきよし問へばあまづみといふ所なるよし次第に山深く分入るままゝに蕨多く生出たり

右左蕨折り行山道かな

荷路夫の境にいれば櫻もいまは盛にして春の名残も頼あり野飼の馬共或は峯にのぼり或は木の間に遊び居たり細き流に土橋わたしたる向ひの岸に山吹いまだ咲残れり

山吹の影もむすばん細流

思ひしよりも日高にこゝに來れるよと語り慰行程に道の左に石有り溪舟が曰去年後の卯月此所に来し時此石を傾城石といふとは人のかたりしとや實に人のうづくまりたるが如し

村に入れば桃花盛りに開き梅もいまだ散残れり申の刻近き頃専八と云者の家に宿る此邊四面山に圍みてむかふの山松に夕日のうつるけ

一五

しき何故とはなけれども浮世の外なる心地せり此宿は寶曆十三年此所に來りし時宿りし家なるよしことし迄三十七年程になるといへり

山里や彌生も梅の散残り

昔此所に宿りし頃は酒うる家もなかりしに星霜うつりぬればおのづから人の心もうつり行にや今は酒うる家ありといへば試に其酒をおぎのりて人々にもすゝめ我も共に一盃を傾るに薄酒なれども苦酒にはあらず年月なくて過ぎぬればことたらぬこそ田舎はよけれと物語りし湯あみしてふしぬ

廿七日 日出て宿を出向ふの山に登る此山は我が薙髮を埋めて軍糧の倉廩を造らんと去年後の卯月溪舟可笑白羽等に命じて地利を求めし處なれば去年の枝折のあとゝめて猶其境を廻るに人家かゝる水の源此山もとに在りていかなる日 तरीにもかるゝ事なしといへり三方

は峯隔り一方は山につゞきぬれど山のたるみ境をなし林木深く生茂りて聞人もなき鶯の聲うるはしく囀るも獨り樂しとや思ふらん此所は聖塚といふよし此山につゞきたる山を權現山といふ聖塚の名もたのもしければ此所に我が遺影をとゞむべしと定めぬ

若草に名を留ばや聖塚

鶯よ人の友喚べ夢の跡

山を下り谷の流にそひてゆけば危石水中に欹ち清音おのづから耳底を洗ふまみやふといふ所に至れば山下に少し人家あり山間の風寒し衣の襟打合せて春ともつかぬ心地せり若葉にまじる遅櫻畑のひまひま桃も開きて一しほにながめ多し

春遅し此山里の桃櫻

行けども盡さぬ山路に蕨多く生たるを人々手ごとに折行けば忽に手

は盈り程なく柏坂と云所にかゝる荷路夫より此所まで一里といふ荷路夫と旅人との境也坂の左右柏多く此とうげにしばしかち人の勞を休むこゝより佛具山近く見ゆ山の間より海上遙に平田遠ふして關田の山遠樹につらなり景色漢畫にさも似たり荷路夫よりつき來りし男に問へば佛具の麓にしどきの瀧と云あり見渡したる山のあなたなれども上り下りて難所なれば一里半も有べし大たいら村の方より本道を行ば遙に遠しといふ柏坂下り長ししばらく行て右に谷川の流清く大たいら村向に見ゆ此坂十三町ありといふ下りて人家あり問へば高松とて大たいらのうちなるよし此邊佛具山ことに近く森のたゝすまゝい川の流岩にせかるゝ水の音筆にもつくしかたし程なく小川村の境に入て行人塚と云所に駕をとめてながむれば小名のみさき岩間の山鮫川の流下川泉の森も見へて海色遙に絶景也

染分て菜の花黄なり麥の畑

青海や出崎くを一かすみ

小川の小さいらといふ山にまといして各かれ飯とらべける谷の底まては百間餘もあるらん芝生廣く山圍みたる中に谷川の流あり瀬々の岩波雪をひるがへし水清くして底を見る向ふの山はなかばより木立生茂り花の梢に引かへて若葉の色の様々なるも又一かたのながめやけふのもてなしに狩人多く山に入て狩す川のはたに大なる石あり其そばにうごめくものあり手をさしかざしてうかゞへば狩人のまふし設けたる所ぞ有けるやゝあつて狩人をみたり四たり打つれて猪一つ兎一つ猪子二つは生ながらとらへ來る打留たる者にとらせて猪子二つは家産にせんと生ながらもたせぬ

山を下りて入江堰五ヶ村堰を見んと二三町山のこしを通り細道をつ

たい行けば山水湧がごとく流早し石を集めてたゞみあげ傍に水門を設たり爰に至りて碧潭靜にして水底の岩石鏡にうつるがごとく山めと云魚つらんと人々石をつたいこゝかしこの早瀬に綸をくだせとも魚を得ることすくなしひつじのなかば頃彌の介といふ者の家にいたりてけふはこゝに留る椽の前に細き流あり岸の杜若花を催し垣根の前は田面廣く山遠し流にそひたる家なれば水車に臼杵の勞をたすけぬ夜もすがら蛙の聲遠近に聞へて心淋し

廿八日 明行空もはれやかにやゝ旭さし登りて雉子の遠音も心のどけく山をめぐりて三澤と云所にかゝれば青山路をさしはさみてたゞこゝかしこに猪のあらしたる跡のみありてながめなし長子村近くなれば山隔り田廣く景色はれやかなりこゝに鍋釜鑄る者あれば立寄りて見るにたゞらと云物をつくりて鐵をとろかし火の如くなる熱湯を

柄長き鐵器に扱入ていかたに流しいるゝに全くつくり出せるは少し半時計が間なるにしばしのいとまなくかなたこなたに行通ふ其勞勤の甚だしきを見れば鍋かまとていやしむべからざる事むべなる哉爰を出て大島村にいり次郎兵衛といふ者の家に休む日あしを見れば午の刻なり夫より鮫川にそいてしもの方より舟に入り佐藤へ渡る舟よりあがらんとすれば寛明正長出迎ひぬ打つれて深山坂にかゝる坂口に四升清水と云水あり汲つくしても四升づゝ湧出るといふ寛明はいまだしらずといへり此清水に立よりて坂を登り高き所に腰打かけて首をめぐらし佛具山小川の小さいらを指して時遊の事共寛明に物語し山海のけしきに心を樂しましめて

荒海の舟をかそゆる霞哉

黒須野の山打こへて茅手堤にやすらい池の面を見渡すに春も已にく

れんとすれば芦間の鴨も今はなし我歸るを迎ふべしとて溪舟はこゝ
より山こへてかへりぬ羽黒山相生の松も過行て八堀橋にかゝれば溪
舟が子供三人出迎へり打連て溪舟が家にいたれば人々悦迎へて此程
山路のあゆみを勞しぬらんと老をいたはり酒すゝめければいと打興
じて夜更る迄語りあいぬ

物語り先づ山里の櫻哉

戻り笠

去年の秋より共に難波の城中守りて里桃文樂の二君には殊更に交深
かりしに此葉月の始里桃は先たつて東都に赴き文樂はしばし此處に
留れり我も歸郷の時至りて旅立の仕度取營み浪華の高城を出れば秋
の景色も晴やかに籠鳥の雲に登れる心地なれば

秋の空はしめて廣き旅出かな

一とせ此地に相知れる人々見送ければ網島に駕を留め立別れんとす
るに又來りぬべきをはかりかたければいと名残を惜みて

目に見ゆる物皆かなし秋の旅

守口佐田のあたりより願るに高櫓は雲の上に聳て旭に輝き牧方の驛
に至り爰にて時を移し立出けるに淀川の水も靜にして柴の小舟の下

にある様旅の心も珍らしく入相の鐘も程過月も冴渡りたるに虫の聲を聞く

色々の虫の音高し月の晴

斯くて伏見の旅館へは漸く宵過に着く念佛の聲鐘の音殊更に旅の悲を添たり

宿をいて藤の森の先にて夜をあかし露階分けて行けば鶉なくなる深草の野邊は只虫の聲のみ幽に觀修寺の立場に休しに此あたり迄は行人も稀に道の程も淋しく大津に至れば牛馬の往來も絶えて打出の濱より唐崎堅田の方を詠るに霧の籬にへだりて沖こぐ舟も幽なれば唐崎の目あてはいつこさりの海

膳所の城下を過ぎ勢田の橋を渡りて願れば石山の堂森の梢に顯はれ水うみの浪穩かに浮る雲は三上山を纏ひて夕日の照るに橋影のうご

くも今に臥龍の勢を殘せる如し

影うごく入日冷し勢田の橋

琵琶の海も見え隠れになりて草津の宿に入る今年は雲の上人の東路を過ぎ玉へば追分より道を轉して左に行き木曾の旅路に心さし是よりは始めての道すがらなれば山のたゝ住居森の木色も心を配りて日も入相の鐘つく頃森山の泊りに附家居年ふりて竹叢奥深く己がまゝなる庭の林に秋風の雨をそへて吹漑ける猶物寔し

桐の葉や驚くばかりあめの音

夜をこめて森山を出て野洲川を渡ればやがて東雲になりぬ千種の露冷かに程なく鏡山の麓に至る山の頂より巖重りて景色畫けるが如し

朝霧の曇はれたり鏡山

武者を過て名にもふ老曾の森を詠愛知川を涉り多賀明神の大鳥居を

過て松並木を行けば山近くして木色深く秋蟬聲繁く彦根の方は田野
廣くして湖水遙なり是より磨針峠の旅亭に上れば高麗人の畫ける望
湖堂の額有り竹生島月出か崎飯の浦千々の松原平ヶ岳の方迄一望の
中に盡き鏡中の秋色穩なり

秋はれて沖に波なし竹生島

番馬を過ぎて醒井の建場に駕を止るに夜も明やらす流の邊に望は梢
の風は泉の音に和して心涼しく湧出る清水に口すゞきて眠を覺せり
昔日本武尊伊吹山に入り玉ふに大蛇道に横れり尊は蛇の背をふんて
靜に打越し玉へば御心地酒に酔るが如くなりしを此水に足を冷し玉
ひて其熱の醒たるより醒井とはいへると聞く

武士の鏡ぞ秋の水さよき

近江美濃の境なる寢物語の里細き溝を隔て隣國軒端を并たり明方近

き松風に里人の夢も破れやすらん兩國の棒杭も一つ所に立並て千里
も同じ一足に塚を越るとて

こうろぎも壁からかべの旅路かな

常盤御前の墓にて

花におし露を涙か女郎花

名におふ不破の關屋の板庇も名のみ残りて野づらの石垣は苔に埋れ
て

鶴鴿や苔を啖む關の跡

行き過れば松のもとに卒塔婆建たる塚あり里人に問へば關が原御陣
之首塚なるよし猛將勇卒も空しく此の地下に埋れぬらんと哀もまさ
りて

古塚や今は名もなき秋の草

古戦の跡を尋ねんと里人に案内を求め關か原に行きて見るに星霜うつりぬればこゝそこ木色繁りて何れが大軍を動かしたる跡とも見えず劔戟の光は穗に出る尾花に變して四海波を揚ざる昇平之御徳を仰ぎ奉る

野分して土に伏たる尾花哉

垂井川を過て青野原にかゝる此原に熊坂が物見の松ありと聞いていづれの程にやと長き野道に退屈してはや此原も過ぎ行けば今も人の眼を盗めるにやなと戯れてやがて呂久川の流にいたり船のゆきしも速に打渡りて泊りの宿に着加納を出てかゝみ原の松原も過ぎ犬山の城を秋の梢に仰きて鵜沼の宿に休み是より山路にかゝり坂を登りて岩屋の觀音を拜し平地に下れば山水は開きて雨を催す雲は風に隨て出て石に咽ぶ流れは舟を逐て早し所々の詠に心を移して大田河の渡舟

に乗り川中に出て見れば巖浪高ふして東路の不二川にもをさく劣るまじき流なれば

濫あゆのすゝみ兼たり大田川

伏見の宿を打過て今宵は御岳にとまる齋藤坂うとう坂とかいへる所をこへて暫休らふ内に今や朝日の登る頃なり細久手大久手の間は駕の中に眠りて知らぬ山路の夢に驚き下り坂の道はか行きて中津河の驛につけり

落合之橋を渡りて是より左右深山間入りて木曾川の流早く山の茂りも興深く上り下りて三留埜に休らひ岨を廻り坂をこゆるに道行く人も馬も足を勞し廻りくゞて須原のやとに枕を高くす旅のねむりは催せとも身にしむ風に夢を破られて

小男鹿の聲かなさりて夜夢哉

けふも山路に足を勞して行は程なく夜しら／＼と明けり腰の袋の火
 打取出し煙草くゆらして眠を覺しやがて小野の流に至る此瀧の姿千
 仞の石壁より飛流して末は木曾川へ落ちいさきよき景色に心の塵を
 拂ひ清き響に耳の垢を洗ひて彼の瀬川の昔を思ひ出てぬ

松杉に秋の聲なし小野の瀧
 寐覺の茶屋に休らひ臨川寺に行て上りの連に道を問て寐覺の床に下
 るに丸木の橋に清水に苔むして足の踏所も覺す藤かつらに取つき木
 の根を傳て漸く麓に下り床岩に上りて見れば上に神女の社有り水中
 に俎板岩象岩獅子岩杯言ふて様々の形あり彼浦島か釣せしといへる
 淵に臨に木曾川の流も爰に至りて穩に平潭藍の如し双峯相對してい
 ふはかりなき氣色なれば矢立の筆をととりて

床岩の淵にたるゝや鳶かつら

名にしぢふ木曾の棧にかゝれり古歌に　おそろしや木曾のかけ路の
 丸木橋と讀めりと聞く昔はかく危き所なりけらし今は旅路の愁もな
 く心安く打渡りて願るに谷は山高くして風の聲は雲の中に聞く左は
 谷深くして流の音は霧の間に響き數株の喬木眼下にして一日の仙と
 なれる心地せり

棧や木末見をろす鴈の聲

福島の關をも越へて宮の腰に足をやすめて行けるに木曾殿の城も木
 立しげり山頂が平は名のみにして籤原をも行過鳥居峠にかゝれば日
 も山の端にかたむきて旅の心もいそがはしければ

秋風に翹もはやし泊鳥

待宵に月も朧々と吹來る雲木蔭をたどりて奈良井の宿につく木曾川
 の響は遠ざかれども今日もまた谷の流に隨て櫻澤の橋を渡るにこゝ

は木曾路の境と聞て日頃經し佳境もはるばる隔り堺山と聞にも名残
おしく四方の峯は秋の景色もうつり行に木曾山の常盤なる松柏は霜
の後にも恙なからん事を思ひやりて

木曾山のいづくを秋の染所

山路の旅の心あらたまりて洗馬に晝休し桔梗原にいたれば秋之空も
廣々と山の形もふとやかかなり

秋草の名も開きたり桔梗原

など口號て鹽尻の峠に登れば一村雨の雲を吹送りて道行人も足を早
め笠を傾けて坂を下れば諏訪の湖水は一日にして八ヶ岳に雲おける
景色面白く高島の城は落日に輝き鹽尻の峯は過雨に曇りて山下より
虹を吐くあり様恰も繪かけるが如くなれば

雨はれて虹も錦よ秋の山

坂を下りて水に足を洗ひ駕に乗りて諏訪の泊りにつけり今宵は殊更
に名月なれば一杯の興に旅情を轉して

更科の咄も出たり今日の月

雞の聲も所々に諏訪の宿を出て程なく和田にかゝれば雲霧も衣をう
るをして膚冷に山をめぐり坂を攀て立場の茶屋に暫く勞を助く

口すゝぐはくきつめたし秋の水

爰を出て峠へ向ふに坂急に道曲りて馬も蹄を勞せり朝霧深く立ち隠
してければ山之頂より願るに坂を登る菅笠は白龍の雲に登るが如し
旅の衣は打しめりて膚冷し咫尺の間も分ち難く行先に迷ひ漸麓に下
りて願ればいづれを味田の山ともわかずはらへの原とかいへる所此
處よりは姨捨更科も程近し今日も山路につかれて望月に至り今宵は
此處に泊る

旅寮の枕夢断てやがて望月を出てこうま河の橋を渡りまた山路に氣をくづしてうりう坂などいへる所をこへて八幡の宿にいるその原山ふせ屋の森も是より東にあたりとぞ聞ゆ筑摩川の橋を渡るに水之流の早ければ心も穩ならず なた岩村田を過ぎ廣き原あり半行過ぎて左に五十間程草ふみ切りたる如くに少し窪き所あり里人に問へばこうげつの輪といふいかなる跡にやと尋るに明神の馬を乗り玉ふ所なるよし其形丸ければ月にかたとりてこう月の輪といふなるやと

月影や駒の蹄の水溜り

小諸の宿を出離れば渺々たる野原有り雨の日なれば吹き來る風も寒うして枝垂松にも露を含みて面白き景色なり淺間の嶽は霧の間に入りて望たへたれば

名も高き淺間は霧の離哉

駕より出て草鞋をはき沓掛輕井澤を過て笛吹峠にかゝるに權現の邊よりは道も峻しく雨に溜る岩間の水は坂に流れ風に落ち葉末の露は笠に響きて峠をこへけるに往昔日本武尊の吾妻よやとの玉ひしも此所なりと思ひて

旅人の見かへる方や鹿の聲

是より砂原のあたりを行くに猶雨も止まざれば山も谷も雲に埋れて足元も覺束なし般若岩の險難もこへ遠見番所のあたりにて日も暮ぬ松明の火を頼にたとりたとりて坂元の宿に泊る有明の月白くあけ行く山を見れば瀧の白糸遙々と碓日川は横川のほとりを廻り妙義山の雲を貫く勢筆にも盡しかたし此邊も山下なれば秋も稍身にしみ木々のもみじも取々なり

山畑に案山子の形りもうす寒し

松井田安中のあたりは家毎に機織糸を取りて賤か所爲も似合しき事にそ板鼻を過行は高崎の城は森之梢にしろみ烏川の水は泥に黒みてわたりも絶たれば今宵は倉賀野に宿を定む旅の疲に心ゆるして今朝は旭の登る頃ふと夢斷へ川の涉を尋るに滞なしと聞く嬉しく旅出の仕度取あへず羽織打かけ庭の日さしを窺ひて

窓あけて日なたも寒し秋の蠅

此頃の雨に烏川も早く新町を打過ぎかな川を渉るに此所は北條氏政と瀧川一益が戦ひし所なれば

水底に朽るつるきや鮎のさび

本庄の宿をはなるれば日光の御山雲の上に高し小山川の水も身にしみて岡部の原の萩原を過ぎあつま村とかいへる廣き原あり熊谷の宿

へ夜に入りて着きぬ

夜をこめて泊の宿を出て箕田村には彼の渡邊が氏神と聞くもたのもし桶川上尾をも過ぎ氷川の明神に参り宿の無難をいのり大宮原にさしかゝれば竹の一むらの中に熊澤の何某が屋敷あり此邊は冲津白浪の立來りて一人二人の夜の旅路はやすからぬとそ聞く日も暮近くなれば二里塚を中に道を急ぎて遠寺の鐘の幽に泊り雀の聲かまひすし浦和の宿につく明日は江戸に歸り着かんと旅の枕に夢も結はす月夜鳥の鳴惑して浦和の宿りを出て蕨の宿を打過ぎしにまた夜も明けされはあら屋の軒に露を避けて駕の中に餘睡を催し明渡る空に月も白み飛鳥の聲もとりとりに人の面も見え分れば船に乗今日は古郷にも我を待らんと道の程もとかしく戸田川の水には張翰が情を思ひ武藏野の薄には忠盛の詠を感じて

秋風にまねく尾花や戻り舟

風飄々と衣を吹て川を越れば賤が白引小歌も一入耳なれて板橋に晝
休し家に歸れば皆人出迎ひ勇合て長途の旅の恙なきを喜ひ一とせの
留守の平安を祝して盃取敢へす酌かはし園の松の秋風は軒に近く籬
の菊は長月の空を待て一二輪開ける笑顔も珍らかに越し山路の程遠
く過し月日の待に久しかりしも皆物語のたねとはなりぬ
古郷に菊も待てや花の笑

明治四十四年十一月一日印刷
明治四十四年十一月四日發行

編輯兼
發行者

汲 深 會

右代表者

來 島 正 時

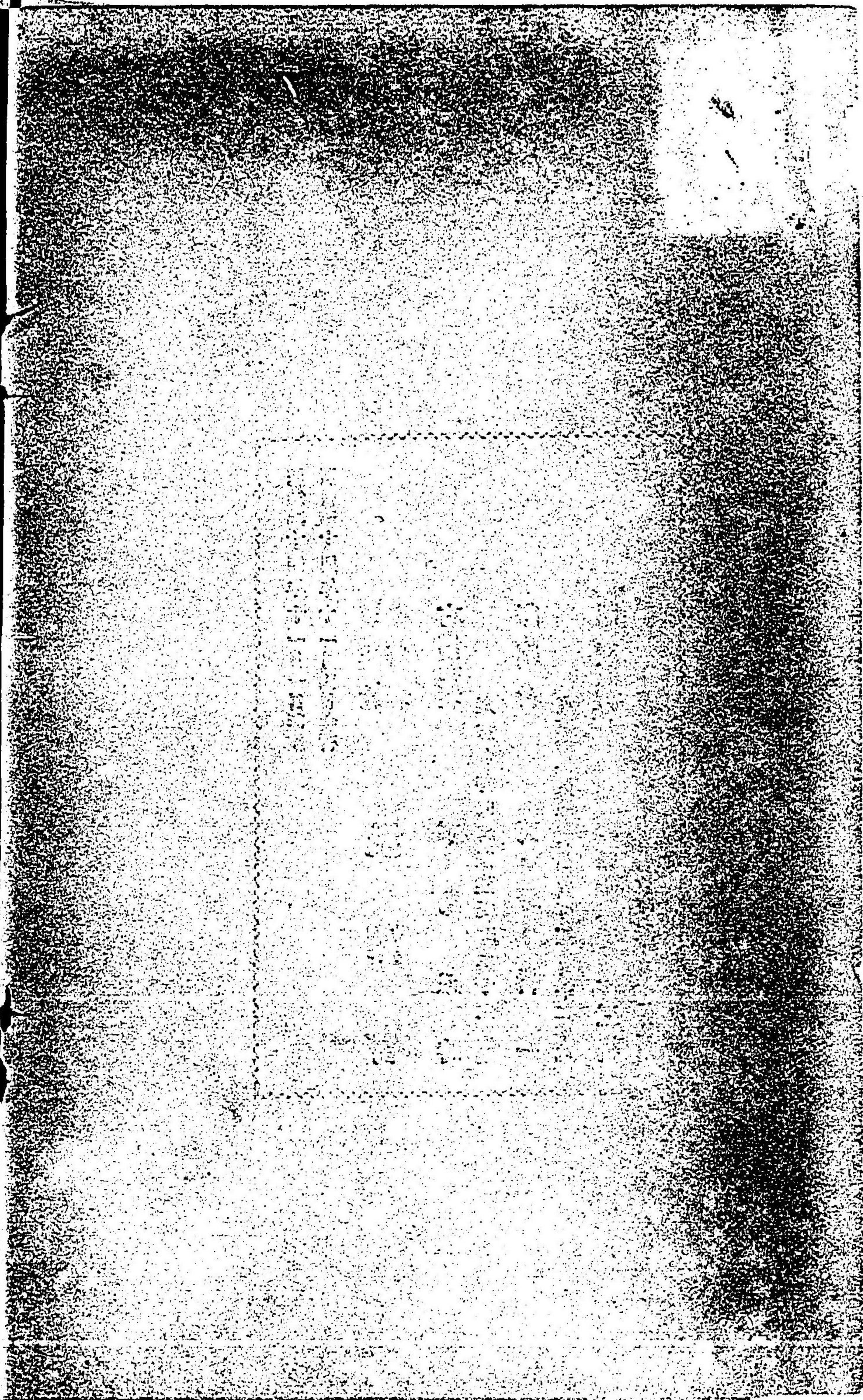
印刷者

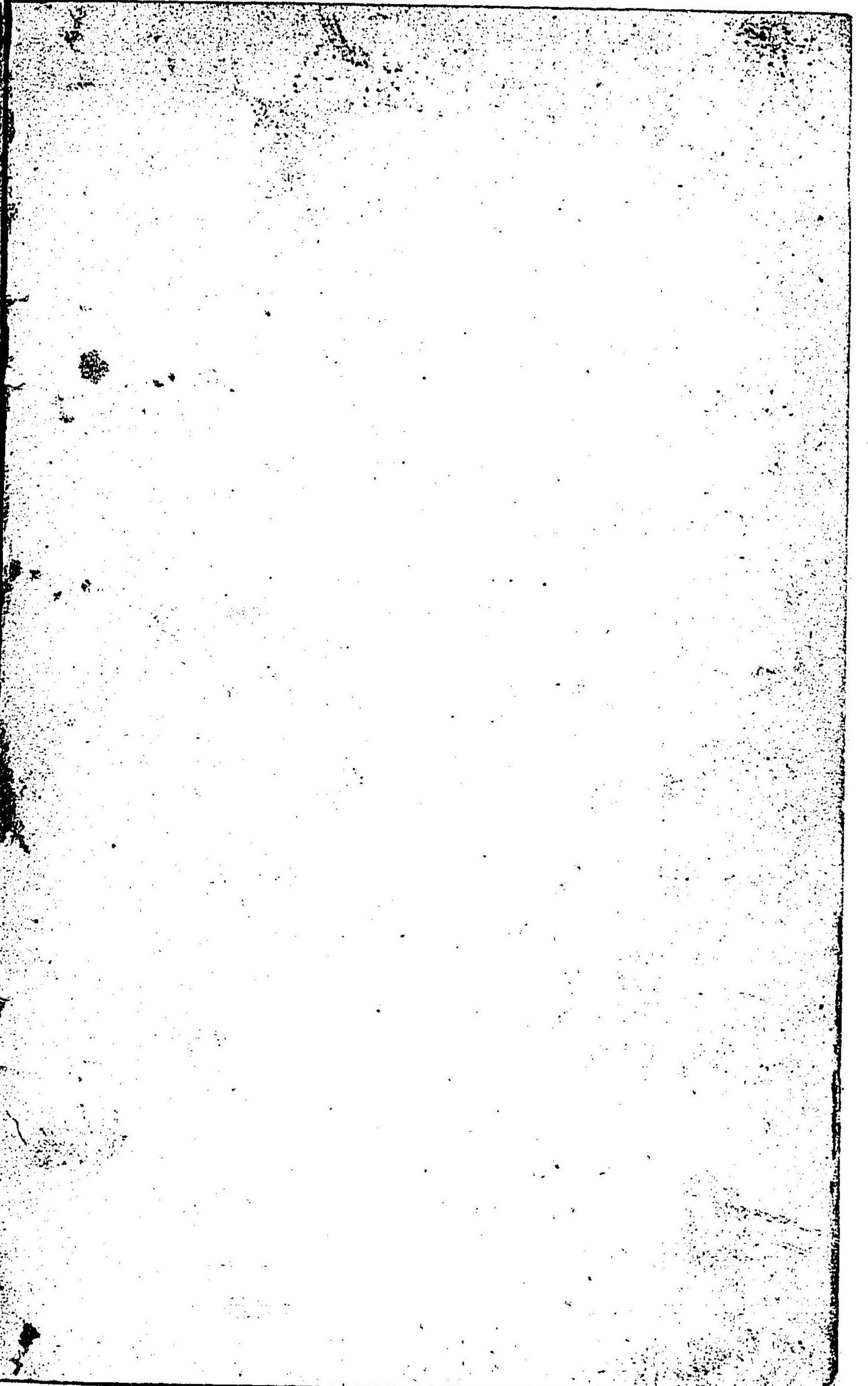
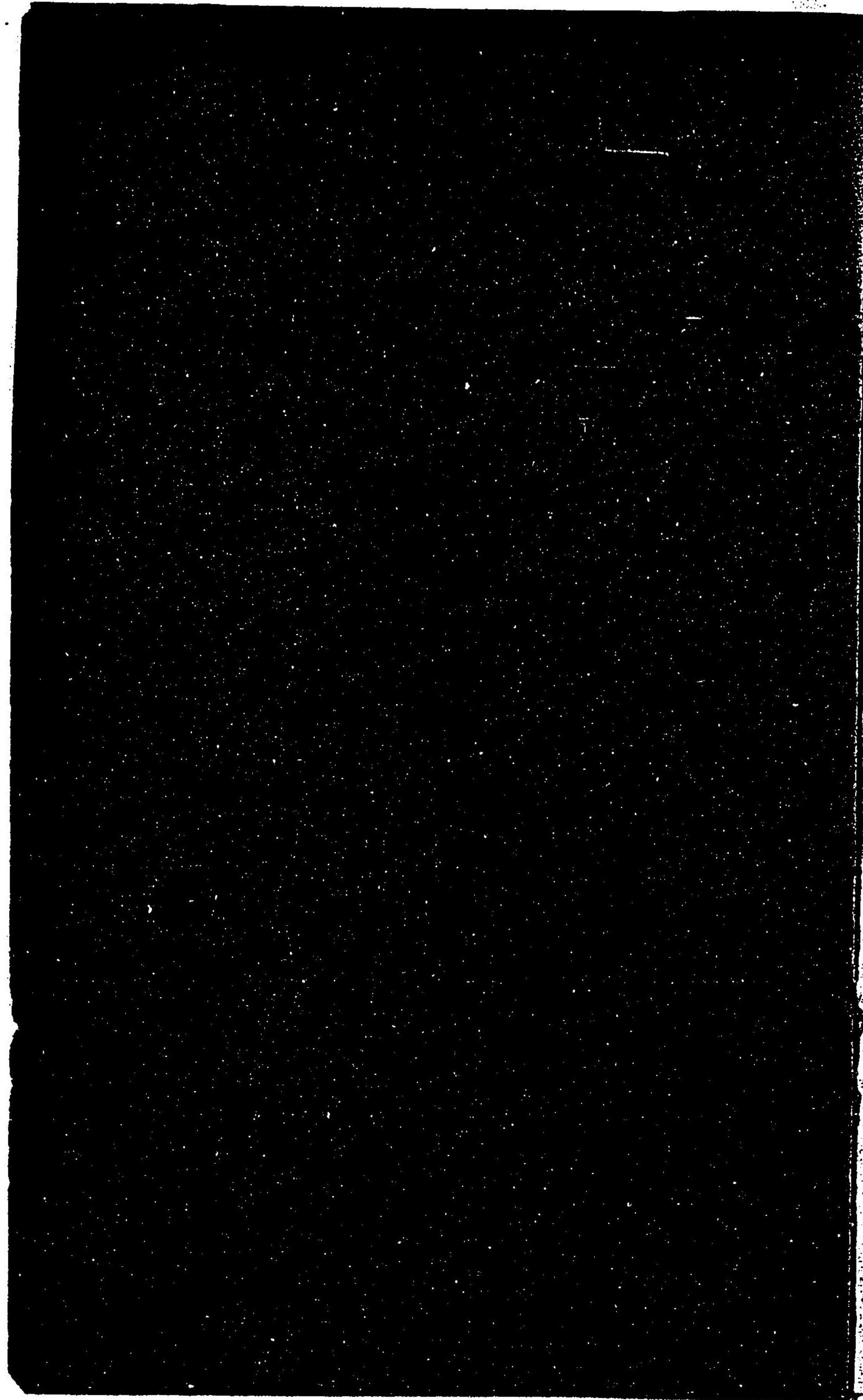
天 野 耕 一

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
鐵秀英舎第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

889
6







Vertical text or label on the left edge of the dark area.

忠籌公御遺稿

084925-000-6

339-6

忠籌公御遺稿

本多 忠籌 / 著

M44

DBB-0212

